

東京農業大学の沿革

榎本武揚と横井時敬

創設者は、明治の英傑榎本武揚だ。明治政府で外相、文相、農商務相などの要職を歴任した榎本は、明治24年（1891）、東京に「私立育英黌」を設立した。その農業科が東京農学校、東京高等農学校と名を替えつつ、拡充の歴史を歩み、今日の東京農業大学となる。

東京農学校時代の明治28年、評議員として参画したのが、明治農学の第一人者横井時敬だった。「人物を畑に還す」「稲のことは稲にきけ、農業のことは農民にきけ」と唱えて、「実学」による教育の礎を築き、東京農業大学の初代学長を務めた。本学の「生みの親」は榎本、「育ての親」は横井である。

傘下に東京情報大学

東京農業大学は、農学部、応用生物科学部、地域環境科学部、国際食料情報学部、生物産業学部、短期大学部の6学部21学科からなり、大学院は2研究科14専攻体制が整っている。世田谷、厚木、オホーツク（北海道・網走）の3キャンパスに学生・院生ら約13,000人が学んでいる。

学校法人東京農業大学の傘下に、東京情報大学（千葉）がある。総合情報学部4学科、大学院1研究科で、学生・院生は約2,300人。傘下には、他に併設校として農大一高／中等部、同二高、同三高／附属中学、そして成人学校がある。

学校法人東京農業大学広報部

「稲に聞く～イネとお米が教えてくれること～」



東京農大「食と農」の博物館

東京農大「食と農」の博物館の常設展示、「稲に聞く～イネとお米が教えてくれること～」が3月26日からリニューアルされた。（展示内容の説明は7ページ）

同館では、「海外姉校妹交流」展（5月9日まで）、「農大探検部50年のあゆみ」展（4月25日まで）が開催されている。



（写真、左上から時計回りで）稲を乾燥させる「棒がけ」＝手前と「はざがけ」＝奥、稲の花、和紙で再現した昔の農作業の風景